

今も瀬戸内にそびえ立つ鈴木商店の煙突

■ 工期7カ月の巨大煙突～山口県

もう一つは、現在の周南市にあった日本金属徳山製錬所(当初の社名は鈴木商店亜鉛製錬所)である。当時、亜鉛の製錬のために7カ月の歳月をかけて巨大な煙突を建設。その後、輸入による原料確保が難しくなり、大正9(1920)年には閉鎖される。しかし、この土地は、鈴木商店の帝国石油(後、旭石油)徳山製油所として使用されることになる(鈴木商店破綻後、後の昭和シェル石油、現・出光興産に合流)。



72メートルの大煙突(稼働当時)



現在の姿

現在は、鈴木商店破綻後、南満州鉄道の子会社として設立された日本精蠟がこの土地を引き継いでいる。同社の設立を指揮したのは満鉄総裁の山本条太郎であった。同氏といえば、大正5(1916)年に鈴木商店の金子直吉とともに日本火薬製造(現在の日本化薬)を設立した人物である。

日本精蠟がこの場所を選んだのは、山本条太郎の金子直吉との縁もあったかもしれない。なお、日本精蠟の敷地内には、鈴木商店、そして帝国石油の境界杭が多数残っている。



日本精蠟の敷地内に残る鈴木商店と帝国石油の境界杭

☆☆☆

大正4(1915)年の11月1日には、金子直吉が「天下三分の宣誓書」をロンドン支店長の高畑誠一に送ったとされる。ほぼ同じ時期に建てられたこの2つの巨大な煙突は、鈴木商店の衝天の勢いを象徴するものといえるかもしれない。